

復興塾通信

11号

2004年1月

三つ子の魂

小森 星児（復興塾塾長）<komori@kobe-yamate.ac.jp>

書類を整理していると、『WAVE117』創刊号所収の「神戸復興塾講座」がでてきた。7年も前のことなので書いた本人も忘れていたが、初心に帰るのも意味があると考えその一部を再録しよう。

「神戸復興塾に集うメンバーの特徴を一言で表すすれば、どんな場合でも自分の足で立ち、自分の声で話すことのできる男女たちというのがもっとも適切であろう。集団主義が依然として支配的なわが国では、こういう人びとはとかく一匹狼として敬遠されがちであった。しかし、わが敬愛するわが仲間たちは獲物を求めてさすらう狼というより、どちらかといえばはぐれ鳥に似ている。（中略）

よくいえば多彩、意地悪くいえば吹きだまりの構成から察せられるように、復興塾は政治的信条や職業的利害を同じくする団体ではない。強いて共通点をあげると、神戸のまちとそこに住む人びとにたいする愛着、道路や建物を作るのではなく以前の暮らしを取り戻すのが真の復興だという信念、それぞれの地域が長年にわたって築いてきた環境や景観にたいする畏敬と伝承の思い、多様なものの共生と交流をもたらす豊かさが活力の源泉であるという見方、程度の差はあれこうした考えが塾生の間で共有されていたために、緩いが長続きする関係が生まれたのであろう。

ところで、復興塾の主な活動領域は福祉や仕事を含むまちづくりにあるが、震災直後から行政主体で進められてきた復興「まちづくり」とは発想の原点が異なる。やや誇張して両者の違いに注目すると、行政の場合、まず倒壊家屋の戸数や公共施設の損害を調べ、いかに早く失われた分を取り戻すかの計画を立案する。その背後には、当人ですら気づいていないことが多いが、「まち」をつくるのは基本的には道路や建物など都市活動の容器であるとのパラダイムがある。われわれの立場は、「まち」をつくっているのはそこに住み、働き、学ぶ人びとの相互のつながり、地域の記憶やモニ

ュメントとのつながり、こうしたつながりが幾重にも織り込まれた多重ネットワークがまちの個性や生活世界を形成しているのだから、まちの復興とは長い歳月をかけ unnecessary 要素が淘汰されてできあがったネットワークの再生に重点を置くべきだということになる。

公平に見て、緊急事態の際は東洋医学より外科手術のほうが適切かもしれない。（中略）震災を契機に、関東大震災や戦災復興で先輩たちができなかった老朽過密市街地の大規模更新を一挙に達成したいという夢は、それなりに筋が通っている。しかし、手術は成功したが、患者は救えなかったということもある。まちの復興を人口や着工戸数で計るだけでなく、以前住んでいた人びとがどれだけ戻ったかという尺度を取り入れた新しい復興指標が、今こそ必要である。」

当時としても、こうした意見は決して目新しいものではなかった。たとえば震災1周年の感想として、筆者は、「長い年月をかけて醸成されたコミュニティの精巧な人間関係の絆は、簡単に移植したり複製できるものではない。若い世代はどんな環境でも用意に新しい絆を結ぶことができる。ニュータウンが成功したのは、こうした能力のある層を対象にしたからだ。逆にオールタウンに取り残された層が今回多くの犠牲者を生んだ。しかし、そのまちこそ住民が生き埋めの隣人を救出し、避難所で乏しい食料や飲み水を分かち合う防災モデル地区であったことを見落としてはならない」と指摘し、「被災地の再建はまず震災以前のまちの特色を生かしつつ、どんな夢を描くかからはじめるべきであろう。兵庫県は創造的復興を掲げているが、まちづくりに関しては想像力に富んだ復興がなによりも望ましい」と述べた。（毎日 96/01/11）

被災による10年の遅れを取り戻すより、10年後の課題に取り組むべきだと主張した復興塾として、今回の検証は10年前の尺度ではなく、10年後の尺度を用いるべきだと改めて主張すべきではなからうか。

今回「9周年を迎えて改めて思ったこと」「10周年に向けて今年のアクション」と題して、塾通信・まち研ニュースを発行しました。この1年の重みを痛感しながら、「当事者でない私は何ができるのか？どんな役目を背負っていくのか？」復興塾の皆さんの原稿を読ませていただきながら、改めて考える機会を得ることができました。

塾生の皆さんだけに限らず、通信を読んでいただけるすべての皆さんが、この通信を読みながら、もう一度“改めて”の時間がとれますことを願っています。

お忙しい中、原稿協力いただいた方に感謝申し上げます。

まち研事務局 東末 真紀

「被災地の人たちは、全国に広がる 被災地化 にどう向き合うのか？」

昨秋、神戸商科大学の学園祭で講演した同大OBの経済評論家、内橋克人氏から寄せられた問いかけである。

震災直後、被災地の公園には、住まいや仕事を失い、ブルーシートのテント生活を余儀なくされた人たちがあふれた。あれから9年。「震災避難者」こそ解消されたが、長引く不況でホームレスの人たちが増え、あの青色が全国を覆っているかのような閉塞感を覚える。

震災復興を「生き残りをかけた競争」という文脈で語る人がある。しかし、一部の「勝ち組」の陰には、たくさんの「負け組」と呼ばれる人たちがいる。

震災の教訓とされる「命を守る」とは、どういうことか。この地域さえ、自分たちさえ良くなれば、ほかを蹴落として

も構わない、という発想では寂しすぎる。内橋氏の発言は、被災という痛みを知ったK O B Eの人間には、「加害者」にならないという強い決意が必要だ、という趣旨だった。

この九年間、「非常時だから」という言い訳のもと、目をつぶってきた矛盾や、後回しにしてきた課題がまだまだある。なぜ、真っ先に守られるべき高齢者や障害者に多くの犠牲者が出たのか。復興計画に、女性や在日外国人の声を入れる余地はなかったのか、等々。

これらを放置したままでは、再び「震災弱者」を生み出す土壌をつくってしまうことになる。隠された課題の検証は、自分自身の矮小さや社会の未熟さを思い知らされるつらい作業となるだろうが、逃げずに取り組んでいきたい。

相川 康子 <aikawa@portnet.ne.jp>

「忘れがたい、おばあちゃん」

「あのベンチに腰掛けているおばあさんと握手してください」

NHKのディレクターが、俺に言った。

1995年6月2日。あの震災のために、時期を遅らせて始まった神戸市議会議員選挙の告示日。阪神電車御影駅前のことである。

「おばあちゃん、お元気ですか」しわくちやの手をしっかりと握りしめる。

「あなた、たすきかけて。選挙でつかいな。たすきかけた人と握手したん、生まれて初めてや」

「何か、しゃべって」と、ディレクター。

「おばあちゃん、今、どこにおるん」

「御影小学校」

「震災前は・・・」

「文化。9,000円の」

「おばあちゃん、何で暮してはったん」

「年金。3万5千円」

「それで、暮せるか」

「それが兄さんようしたもんで、わしら歯があんまりありまへんやろ。そやから、野菜の屑を炊いたもんでまにあいまんね。1万円も、かからしませんがな」

「あと1万円以上のこりまんや」

「それは、葬式代に貯金してまんねん」

「たいへんやねー」

「何もたいへんなことなんかありません」

「地震、たいへんやったねー」

「あれぐらいのこと、生きとったらおこりまんがな。わたしは、小さい頃から何事が起こっても、それがどうしたおもて、生きてきましたんや。

それより兄さん。選挙がんばりなはれや。あんた新人か。通るで」

「なんで」

「なんでで、こんなばあさんに握手してくれはる人なんか、いてはりまっかいな」

「ありがとう。おばあちゃん」

「なにが、おばあちゃんや。おばあちゃんにおばあちゃん言うたらあかん。奥さんって、言いなはれ」

「ほな、お元気で、奥さん」

「おおきに、あんたもがんばりや」

85歳と言っておられたおばあちゃんの指示とおりに「言葉に気をつけ」「握手、握手」「それがどうした！精神」で、市議会議員に初当選することが出来ました。

当選後、御影小学校の避難所を訪ねましたがお会い出来ませんでした。その後、御影の町でお会いすることもありませんでした。

面影が、高校3年生の時に亡くなった俺の母親に似ていたあのあばあさんは。んっ、母親と同じ明治43年生れや・・・

浦上 忠文 <VEN15775@nifty.ne.jp>

「安心の住まい」として

歳の暮れの喪中葉書をいただく量が毎年増えて、溜息が出る昨今。震災後の混乱期、自宅再建のために相談を受け、一緒に現場に通った高齢者が次々と亡くなられ、ご家族からいただく喪中葉書に、やはりこの9年の長さを改めて感じているところ。 「安心の住まい」として生命を守られるべきはずの家屋が、あのように脆く壊れてしまうことに驚愕し、なすべきことは山のように、瓦礫の中を毎日走り回る日々で

した。思い出せば全ては凝縮した昨日のこのことのように。住宅診断に始まり、補修、改築、あるいは、新築。更地になった土地の様々な活用。なかでもコレクティブハウスという新しい住まい方を民間レベルで立ち上げ、新春から「終のすみかをつくる」というNHKの番組でも取り上げられたことは大きな成果の一つとして受け止めています。震災後、高齢者の為の安心の住まいとしてイメージされるコレクティブハ

ウスでしたが、多世代型協同居住「芦屋 17」の住まい方が高く評価されたことに、継続中の苦労も少し報われた気がしています。3年前に完成したコレクティブハウス、高齢者支援型協同居住「ココライフ魚崎」も、住民をサポートするNPO「てみずの会」の活躍で発展的に事業を展開し、高齢者

を支援するシステムが民間レベルで根付いていることにも喜びを感じています。建築というハードの仕事ですが、「安心の住まい」としてコミュニティとまちを支える仕掛けとしてのソフトも大切であることを伝えていきたいと思っています。
野崎 瑠美 <rumi-ysw@nifty.com >

復興検証のものさし

阪神・淡路大震災から10年目に入った。この間、私たちは被災地の復興を考える際に、どんなものさしを使ってきただろうか。

被災地全体を見るときのものさしは「震災前」であった。地域の経済力というならば、全国の足どりと比べて、地震で大きく落ち込んだ地域の生産力（地域GDP）を3年後には震災前の水準まで引き上げ、5年後には全国の成長ラインに合わせたいというのが、兵庫県が策定した産業復興計画の骨子だった。行政ばかりでなく市民の方も自然と、失ったものをどう取り返すかという観点から、その時々の実情を震災前と比べるクセが身についてしまっていた。

いま10年目を迎え、私たち被災地はあらゆる分野で血のにじみ出るような苦労を重ねてようやく一定のものを獲得してきた。震災前にはほとんどなかった新しいものも実現してきた。ボランティア活動やNPO/NGO活動もそうだし、女性グループが中核となった福祉支援の動きも活発だ。対象もミニデイサービス、配食、移送、宅老サービスなど広がっている。まちづくりや環境保全、子どもの課題などを担っている市民グループも増えている。

こうしたさまざまな新しい活動を喜ぶとともに誇りに思

いたい。「震災前にはなかったことだ」と

だがそこで満足してしまっただけでは、単なる自己満足やお国自慢にすぎなくなる。なぜならば、例えば福祉の分野で始まっている多くの変化は、“被災地特殊事例”でないのかもしれない。震災後の10年は、「日本の社会にとって失われた10年」と呼ばれている時期とかなり重なっているが、それでも社会、経済、行政の機能は大きく変わってきた。新たに生まれた制度や仕組みもずいぶんある。

福祉分野で次々と手がけられている事業は介護保険制度と無関係でない。全国各地で同じような展開がなされているかもしれない。政令指定都市のなかで神戸市の福祉の水準が震災後非常に向上したといわれているが、果たして現況はどうなのだろうか。（ここでは詳しく述べられないが施設のデータでは「中の下」といったところか）

震災復興の検証は地域内だけのものさしでは不十分だろう。被災地の動きを全国の動向とも比較しながら相対化することを忘れてはならない。

ことし考えていきたい仕事のひとつは幅広い検証の視点を養い、その目線で足元を見つめることだ。

山口 一史 <VEN15142@nifty.com >

10年目 1月17日を迎えて考えたこと。今年1年なにをするんだ。

昨年SARSで延期になった復興クルーズは、8月13日に出港が決まりました。事務局長としては、今度こそ病魔退散を祈って門戸厄神のお札でももらいに行こうかと考えています。しかし、実は復興クルーズは「1月17日を迎えて考えたこと」でもなければ、「震災から10年というテーマ」でもありません。

来年の5月、韓国からパンソリの人間国宝、チョ・ソニョ先生一行を招いての神戸公演の会場が、私にとっての震災から10年の区切りとなるはずです。

震災の年に、私が関わったのが、チョ・ソニョ先生一行の来日公演でした。思い返すと、その前年、韓国映画「西便制」（日本では、「映画風の丘を越えて」の名で公演された）が爆発的な人気を呼び、韓国の伝統芸能を見直す機運が盛り上がりました。映画だけでなく本物が聴きたいという声を受けて「本場のパンソリを聴く会」のツアーを実施したところ、たいへんな好評を得ました。さらに、この企画は、韓国観光公社の企画優秀賞に輝き、賞金50万円が副賞をいただきました。人から誉められて賞金までいただいたことに気をよくして「今度は韓国からパンソリの名手でも呼ぼうか」などと賞金の使い道を話し合っている時に震災が起こりました。

会の代表である大阪芸術大学の中山一郎教授と事務局である私は、長田の韓国学園に駆けつけて、この賞金を寄付したいと申し出たところ、被災した在日韓国人の面々から叱り

つけられました。「今、世界は長田に注目しているんだ。こんなチャンスはないぞ。パンソリでもらった賞金ならば、世界一のパンソリを長田に呼んで公演をやりなさい。」と・・・

引っ込みがつかなくなって「やります！」と手を挙げたところ、韓国のソウル放送局が協力を申し出てくれて、すぐに、人間国宝チョ・ソニョ先生に話がつき来日公演を快諾すると連絡が入りました。ここから先は、5月の公演まで、信じられないほどの人々が力を合わせて怒濤のような数ヶ月がたちます。

公演は2回。1回目の公演は大阪生野区のプール学園で1200人が会場からあふれ、長い列ができました。2回目が本番。しかし長田公演は雨にたたられ、焼け跡を歩いて西神戸YMCAのバスケットコートに集まった400人を前に、チョ・ソニョ先生一行の熱演が続き、最後に全員が踊りだした瞬間。そう、この瞬間からの10年が、そこに居合わせた人々にとってなんだったんだろうか。

そんな思いを込めて、あの日と同じ出演者、同じ演目で2005年5月の長田公演を、10年目のその瞬間に再演することになりました。

この公演は塾の取り組みではありませんが、塾生の方々のご協力ご支援のほど、よろしく願いいたします。

本場のパンソリを聴く会事務局

山田和生 <ud4k-YMD@asahi-net.or.jp >

まち研ニュース 8号

「合意形成」について思うこと

野崎 隆一（神戸まちづくり研究所事務局長）

<VZD07604@nifty.ne.jp>

震災後、白地地域の復興に関わり始めて現在に至るまで、決して頭を離れないキーワードが「合意形成」。マンションの再建、市場跡の住宅共同化などのプロジェクトにおいても、常に「合意形成」の壁が立ち上がった。しかし、多くの失敗事例はあったものの、復興という共通目的を持っている場合は、置かれている状況についての確でタイムリーな情報の提供を行い、注意深く双方の言い分を聞き妥協案を提示することで、決定的な対立を乗り越え、関係者は、最良の選択を行ったと言える。

行政と市民の協働の局面でも、行政側が市民側に抱いている決定的な不信は、「合意形成」の能力だと言える。現在の地縁組織は、「まち協」をのぞくと「合意形成」能力を備えてはいない。地域でお世話する人だから、合意形成は要らない。行政もそれを求めてこなかった。震災後、東灘区のある地区で「まち協」を立ち上げようと地域の有力者を訪ね歩いた。その時、多くの人からでた言葉が「私達は、個人の権利には立ち入らないのが流儀だ」というものだった。

震災直後の集会で、何度と無く「試練を受けてこなかった戦後民主主義は、復興の中で機能していない」と発言した。民主主義とは、宮崎学（「民主主義の原価」）によれば、利己的な個人を前提としながら、統治者と被統治者が同一であることを原理とする統治形態である。つまり、その社会の構成員全員が全員を統治するということから、利己のために利己が犠牲になるというパラドックスが最初から存在する。このパラドックスの存在により民主主義には、当然コストが発生するというのが、宮崎の考えである。

私にとって「民主主義のコスト」という概念は、目からウロコであった。これを合意形成に当てはめれば「合意形成のコスト」という考えが当然のごとく現れる（やっぱりコストは、かかるんですよ、皆さん）。でも公正性を維持しながら、誰が、どのように負担するのか、またコストを最小限にするためには、どうすれば良いのか、今後は、コストの存在を前提に対応を考えれば良いということは明らかになった。

神戸まちづくり研究所・神戸復興塾活動記録(2003/12～2004/1)

- 12/25 (修学旅行受入事業)2校申し込み受付
- 1/ 5 復興塾・まち研新年会
- 8 行政・NPO 協働助成打ち合わせ(於篠山市役所)
- 10 明舞まちづくりサポーター座談会
- 14 日中交流・復興クルーズ2004 実行委員会
- 17 かってに、こうべウォーク
- 20 (修学旅行受入事業)
ふるさとひょうご創生塾神戸交流会と打ち合わせ
- 21 (修学旅行受入事業)
灘区の防災コミュニティ会長へ趣旨説明
- 22 ラジオ関西「おむすびほっかほか訪問」企画委員会[23]
- 23 NPO 法人「ひょうごまちづくりフォーラム」
開設シンポで塾長が基調講演(於姫路商工会議所)

- 1/30 (修学旅行受入事業)
灘区役所・灘消防署と打ち合わせ
- 31 第1～4回明舞ワークショップ広報ペーパー
(A3ニツ折/2色刷)を明舞団地約11,000戸に配布完了

今後の予定

- 2/ 4 NPO 育成支援アドバイザー派遣事業後期報告会
- 5 NPO と神戸市の協働研究会世話人会
- 14 第2回明舞まちづくりサポーター座談会
- 16 日中交流・復興クルーズ2004 実行委員会
- 17 神戸復興塾勉強会
- まちづくりワークショップ(丹波:2月、但馬:3月)も計画しています。

特定非営利活動法人神戸まちづくり研究所・神戸復興塾

〒651-0076 神戸市中央区吾妻通4丁目1番6号 TEL:078-230-8511 FAX:078-230-8512

E-mail = LET07723@nifty.ne.jp Homepage = <http://www.netkobe.gr.jp/machiken/>